

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2428 号

The diagnostic yield using ultrasound-guided needle-aspiration for subpleural primary lung cancer is not affected by the radiological properties of the lesions resulting from computed tomography

(胸膜直下に存在する原発性肺癌に対する超音波ガイド下穿刺の診断率は CT 画像から得られた病変部の画像の特性の影響を受けない)

岩神 直子 (いわかみ なおこ)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、原発性肺癌に対する主要な検査の一つである超音波ガイド下穿刺において、その診断率に影響を及ぼす因子を明らかにした臨床的に意義のある論文である。

胸膜直下に存在する原発性肺癌の診断において、超音波ガイド下穿刺は安全かつ有用で診断率も高いことが知られている。しかし、超音波ガイド下穿刺を用いても診断に至らない症例があることも事実であり、どのような因子が超音波ガイド下穿刺の診断率に影響するのかは明らかではない。本論文では、超音波ガイド下穿刺を実施した胸膜直下の原発性肺癌を有する症例の computed tomography (CT) 画像所見や病理診断を解析し、診断に影響を与えた因子を統計学的に解析している。超音波ガイド下穿刺を行った胸膜直下の原発性肺癌を有する自験例 87 症例を後方視的に解析した結果、全体の診断率は 86.2% と高い診断率であり、CT 画像所見によって診断率は影響を受けないことを明らかにしている。本論文では、胸膜直下に存在する原発性肺癌の診断を行う際は、CT 画像での病変部の特性に関わらず、本検査を選択すべきであると結論づけている。その一方で、病理診断を加えた解析では、扁平上皮癌の症例で有意に診断率が低いことも明らかにしている。他の様々な検査結果から扁平上皮癌が予測される症例では超音波ガイド下穿刺の扁平上皮癌での診断率が低いことを念頭に置き、気管支鏡下生検や外科的生検を選択することも考慮すべきであるというように、超音波ガイド下穿刺を実施する上での注意点にも言及している。

本論文で明らかになった結果は、原発性肺癌の診断計画を立てる上で非常に有意義であり、今後の肺癌診療に大きく寄与するものと考えられる。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。